TRAFFIC ADVICE ［東京エレクトロン九州（株）安全運転研修］

★交通教育センターから

実技の中で自ら気づいたことを交通安全に活かす

3月18日、交通教育センターレインボー熊本で東京エレクトロン九州（株）の安全運転研修が行われた。この日の研修には、同社の安全衛生委員会と協力企業で組織される協力企業連絡会のメンバーの内、10名が参加した。

同社は、半導体製造装置の開発・製造などを行う企業で、月に一度の安全衛生委員会・協力企業連絡会では、通勤や社有車での移動に関する交通安全の情報を共有し、交通事故防止に取り組んでいる。研修を担当する、同社総務部環境安全管理課の佐々友明さんは「交通安全は、呼びかけだけでは他人事になってしまいがちです。研修の実技を通して、どうしたら安全な運転に近づけるのか、自ら気づいて、安全意識を高めてほしい」と話す。

午後1時、開講式の後、交通事故の特徴や発生原因について座学が行われた。続いて、動画※ＫＹＴを使って危険予測のトレーニング。受講者が危険に気づいた場面の映像を振り返って、危険と感じるポイントを確認しながらお互いの危険感受性を高める。インストラクターが「日常の運転でも、危険がありそうだと思う状況を意識して、早めに車間距離をあけておくなどの対応をしましょう」と危険予測運転の重要性を伝えた。

動画ＫＹＴでは、駐車車両の横を通過する際などの映像を使って、起こりうる危険を予測するためのトレーニングを行った

タイヤの空気が減っていると、走行時にふらつき危険であることを確認

2時からは、実技。車両点検の方法をインストラクターが説明した後、クルマの片側だけタイヤの空気圧が低いと走行がふらついてしまうことを実験で確認した。また、インストラクターがダミー人形を使ってクルマの死角について説明。乗車前に、クルマを一周して安全を確認することが重要だと伝えた。さらに、実際に発炎筒を点火する体験が行われた。

次に、大小のカーブが組み合わされたコースを実車走行。シートに深く腰掛けた運転姿勢と背もたれをやや倒した運転姿勢、ハンドルまでの距離が近い窮屈な運転姿勢の3つを試しながら、運転に適した正しい姿勢を確認。また、スムーズにハンドル操作ができるよう練習を行った。

発炎筒の点火体験

続いて、「止まる」トレーニング。まず、目標位置からの急ブレーキを練習。速度は40㎞／hと60㎞／hの2種類、路面は乾いた状態とぬれた状態の2種類を体験。速度と路面の変化による制動距離の違いを体感した。次に、信号が点灯後に急ブレーキを踏む、反応ブレーキ体験。信号に気づいてからブレーキを踏むまで、反応時間に個人差があることを学んだ。最後に、信号が青の時には右にハンドルを切り、赤の時は左にハンドルを切り、危険を回避する体験を行った。「回避するポイントをわずか3メートル先にのばしただけで、危険回避がしやすく感じたと思います。前車との車間距離を長くとることで追突の可能性を減らすことができます」とインストラクターが説明。とっさの危険回避の難しさを体験から学び、研修は終了した。

受講した佐藤徳人さんは、「急ブレーキの体験では、初めてＡＢＳの作動を感じて思わずブレーキの踏み込みを緩めてしまいました。今日の体験でより安全運転を意識できたので、今後は慎重に運転をしたい」と感想を語った。

同社では、昨年から管理者向けの研修に実技を取り入れている。「管理者として、この研修で学んだ経験を他の社員へ伝えていただき、職場全体の交通安全に対する共通認識を高めていくことを期待しています」と佐々さんは言う。

信号が点灯後に急ブレーキを踏み、停止するまでにどれくらいの距離進んだのか確認した

実際に運転しながら、正しい運転姿勢とスムーズなハンドル操作を練習した

※動画ＫＹＴ＝実際に起こりうる危険場面をコンピュータグラフィックスによる動画で再現。受講者は危険を感じた場面で手元のボタンを操作。どの場面でどういう危険を感じたか、危険を招かないためにはどうすればよいかなどを指導者と一緒に振り返り、危険予測能力を高めるトレーニング。

Hondaグループから SAFETY REPO

●本田技研工業（株）熊本製作所・親子交通安全教室

子どもたちに自分の命を守るための安全意識を高めてもらうイベント

本田技研工業（株）熊本製作所では毎年、周辺地域の子どもとその保護者を対象にした「親子交通安全教室」（主催：本田技研工業（株）熊本製作所、交通教育センターレインボー熊本）を開催している。13回目となる今年は3月8日に行われた。

「春の入学シーズンは登校に慣れない新入生が事故に巻き込まれる危険が高まります。小学校入学前の子どもに事故の怖さを体験してもらい、自分の命を守るための安全意識を高めてもらうことが目的です」と、第1回から交通安全教室の企画運営を手がける同製作所事業管理部安全衛生ブロックの三池富美男主任は語る。「製作所周辺で子どもが被害者になる事故を減らすために従業員だけでなく、地元の大津町と近隣の菊陽町、合志市、西原村の各自治体に協力を得ながら、多くの親子に参加を呼びかけています」。こうした三池主任のはたらきかけもあり、参加者は年々増加し、今回は予定していた240名を大幅に上回る360名の親子が集まった。

交通安全教室は午前10時から12時にかけて、参加者は次の3つの講習を受ける。1つ目は講話。大津地区交通安全協会の指導員が人形劇の形式で、子どもたちに信号の色の意味や、道路の渡り方を説明した。この間、親は子どもと別れて、安全運転の啓発ビデオを見た。

大津地区交通安全協会の指導員が人形劇の形式で行った講話

巻き込み事故の実験では、ダミー人形を乗せた自転車が左折するトラックに巻き込まれる様子を親子に見せた

2つ目はダミー人形を使った飛び出し事故と巻き込み事故の実験。飛び出し事故は30㎞／hで走るクルマの前に駐車車両のカゲからダミー人形が飛び出すというもの。どんなに運転が上手なドライバーでも急な飛び出しには対応できないことを伝える。また、ダミー人形を乗せた自転車が左折するトラックに巻き込まれるという事故も再現。トラックに巻き込まれると、ダミー人形は頭から地面に落ち、自転車はトラックの後輪の下敷きとなってしまった。実験を担当した交通教育センターレインボー熊本のインストラクターは子どもたちに、クルマの脇には近づかないこと、自転車に乗る時はヘルメットを着用することをアドバイスした。

3つ目は、シートベルトコンビンサー体験と、大津警察署によるパトカーの同乗体験など。今年から後部座席でのシートベルト着用が義務化されるので、シートベルトコンビンサーで5㎞／hからの衝突を体験して、親子でシートベルトの効果を確認してもらうことがねらいだ。

30km／hで走るクルマの前にダミー人形が突然飛び出すと、ブレーキをかけても間に合わない

シートベルトコンビンサーで5km/hからの衝突を体験

交通安全教室の合間には、熊本製作所オートバイ部の部員たちが運転技術を参加者に披露

熊本県警のマスコット「ゆっぴー」や白バイ、パトカーも子どもたちの注目を集めた

お子さん3人と参加した永潟義洋さん、道子さん夫妻は今回が3回目の参加。「子どもの小学校入学前には必ず来ています。事故を再現して見せてくれるので、事故がなぜ起きるのか、小さい子どもにもわかりやすく伝わると思います。親子で交通安全について考えるいい機会です」と感想を語ってくれた。親子交通安全教室は子どもの安全意識を高めるイベントとして地域の中で定着している。